通時的な観点から見た英語の韻律構造

山　田　宣　夫

0．はじめに

この小論の目的は，英語の様々な史的発達段階において観察される音変化の証拠を調べることによって，Burzio（1994）の韻律理論の妥当性を通時的な観点から明らかにすることにある。

最初に Burzio の韻律理論の要点を簡単にまとめておくことにする。Burzio は，可能な音節の型として重音節（H），軽音節（L），弱音節（W）の三種類を認め，これらを(1)のように定義している（pp.4,16-17）。このうち W は，英語に固有の音節型として，Burzio によって新たに導入されたものである。

（1）　a．H：ライムが２つの位置から成る音節
　　b．L：ライムが１つの位置から成る音節
　　c．W：何らかの聴覚的な弱さを伴う音節（例えば y，ive，ure，[+son]，ϕ）

Burzio は，「英語の単語はすべて母音で終わる」（p.17）と仮定し，W の類に属する要素の一つとして空母音 ϕ を設けている。そして，この類に属する音節は，韻律分析の対象にされることもあるが，韻律外の要素として扱われることもある，という特殊な性質を有すると主張し，次のような例を挙げている。

（2）

	韻律分析される場合	韻律分析されない場合
a．	aris (tocracy)	(accura) cy
b．	ob (jective)	(adjec) tive
c．	ad (venture)	(aper) ture
d．	e (xample)	(carbun) cle

e . de (cemb<u>er</u>) (charac) t<u>er</u>
f . ro (bust<u>ϕ</u>) (earnes) t<u>ϕ</u>

また，英語の韻脚（foot）の構造に関しては，（3）に例示したように，重音節を主要部とする二項韻脚の（H σ）と，中間の位置に軽音節を含む三項韻脚の（σ L σ）は許されるが，（H）のような単項韻脚は許されない，と主張している。

（3） 可能な韻脚	右端でない例	右端の例
a . (H σ)	mo (nòn ga) hé:la	àri (zó: na)
b . (σ L σ)	(wìnnepe) sáukee	a (mé ri ca)

1． 古英語の韻脚構造

古英語の第一強勢は，主として語根の第一音節と，名詞と形容詞の接頭辞に置かれた。第二強勢は，（4）に例示したように，語がLLかHで始まり，かつ何らかの無強勢音節が後続するという条件の下で，重音節に付与された（Hogg（1992:47－50））。

（4） a . ǽþeling ‘prince’ vs. ǽþelìngas ‘princes’
b . Hrŏ̄þgar (proper name) vs. Hrŏ̄þgā̀res
c . cýningas ‘kings’ vs. *cýnìngas

Burzio（1994）の理論的枠組みを前提にすると，（4）の事実は（5）のように説明することができる。

（5） a . (ǽ þe lin) g vs. (ǽ þe) (lìn ga) s
[i. e. (σ L σ)] [i. e. (L σ) (H σ)]
b . (Hrŏ̄þ ga) r vs. (ϕ Hrŏ̄þ) (gā̀ re) s
[i. e. (H σ)] [i. e. (ϕ H) (H σ)]
c . (cý nin ga) s vs. *(cý) (nìn ga) s, *(ϕ cý) (nìn ga) s
[i. e. (σ L σ)] [i. e. *(L) (H σ), *(ϕ L) (H σ)]

まず（5a）について考えてみよう。（σ L σ）と（H σ）という韻脚の型は，現代英語のみならず，古英語においても最も一般的なものであったと思われる。ところが，これらの一般的な韻脚に加え，（5a）の右側の例に見られるように，語中に（L σ）という形式の二項韻脚が生じることがある。Burzio（pp. 86－87）によれば，この種の韻脚は，現代英語においては，語幹の強勢が派生語においても維持されることを要求する強勢保持（Stress Preservation）の条件（例えば me(dìci)nálity (cf. medícinal)）や，与えられた記号列が余すところなく韻律分析されることを要求する完全韻律分析（Exhaustive Metrification）の条件（例えば（àpa)(làchi)cóla）といった，いくつかの限られた条件の下で認可されるという。（5a）の右側の分析もこれらの条件を完全に満たしている。

（5b）の右側の語の分析において，左端に（φ H）という韻脚が仮定されているが，この点は多少説明を要するであろう。Burzio は，空母音の分布に関して，「空構造は右端だけでなく左端にも生起する」（p.99）と仮定し，pre-(vén tφ) や per(vér tφ) のような構造に加え，これらと鏡像関係をなす（φ bàn)dánnaのような構造も認めている。従って，古英語においても，be(gǽ nφ) 'occupy'のような構造と並んで，（5b）の（φ Hrǫ́þ)gǎres のような構造が存在した，と仮定しても決して不自然ではないであろう。

最後に（5c）について考えてみよう。まず，右側の分析はいずれも許されない。理由は簡単である。Burzio の理論では，そもそも（L）のような単項韻脚は韻脚のタイプとして認められていない。また，強弱の（L φ）や弱強の（φ L）といった二項韻脚も，「最適な韻脚の重さ（optimal foot weight）」から診るとあまりにも軽く，それ故不適格な構造と見なされるからである（詳しくは Burzio（1994:147－155）を参照のこと）。他方，（5c）の左側の（cȳ ninga)s という分析は，一見 *(σ H σ) という許されない三項韻脚の型を例証しているかのように見える。しかし，Burzio（1994:58－63）が指摘しているように，/n/のような共鳴子音や/s/によって閉じられた音節には，母音の弱化が起こりやすいという特殊な性質があり，このような弱化が起こると部分的に音量の消失がもたらされ，重音節が軽音節に「降格」されるのである（cf. (paten ta)ble, (or ches tra)）。この事情は古英語においても変わりはなかったと思われる。

要約すると，古英語の韻脚構造は基本的に現代英語のそれとほぼ同じであったと思われる。唯一違う点は，語の第一強勢が，現代英語では原則として最も右側の韻脚に置かれるのに対し（Burzio (p.16)），古英語では最も左側の韻脚

に置かれる，という点である。

2．中英語におけるフランス借入語の本来語への同化の過程

中英語におけるフランス（及びラテン）借入語の最も顕著な特徴は，それらのアクセントが，ゲルマン語のアクセントの原理に従って，語頭音節に移し変えられたことである。この過程によって新たに強勢を付与された語頭音節の母音 a/e/o は，閉音節に位置する場合には短母音のままであったが（6 a），開音節に位置する場合には，本来語の原則に従って長音化するか（6 b），もしくはそれらに後続する語中子音が重子音化した（6 c）(Jordan & Crook (1974: 201－207))。

（6） a．hardi ‘hardy’, bargain ‘bargain’, servaunt ‘servant’, tempest ‘tempest’

b．bacŭn > bācun ‘bacon’, bāsin ‘basin’, māson ‘mason’, lever /lɛ:vər/ ‘lever’, dever /dɛ:vər/ ‘duty’, tresour /treʒu:r/ ‘treasure’, broker /brɔ:kər/ ‘broker’, odour /ɔ:du:r/ ‘odor’

c．passen ‘to stride’, pressen ‘to press’, trussen ‘to pack up’, robben ‘to rob’ < OF rober

これらの変化は Burzio の枠組みに基づいて簡単に説明できる。すなわち，母音の長音化や重子音化の結果，これらの借入語はすべて，(H σ) という本来語の韻脚構造に合致するような形に修正された（例えば (har di), (bā cu)n, (pas se)n)。つまり，これらの変化はいずれも，本来語の韻脚構造が引き金となって生じたのである。

3．“Arab Rule”の制約による短母音化の現象

Hayes (1985:177) によると，Arab の発音として [ærəb] と [eyræb] はどちらも可能だが，*[æræb]や *[eyrəb]は許されないという。Burzio (1994: 89－91) はこの事実を次のように解釈している。すなわち，Arab のどちらの発音も単一の韻脚から成ると仮定すると，韻脚全体のプロミネンスは違うけれども，二つの音節の間の関係は常に一定していて，一方の音節のプロミネンス

が大きくなれば，もう一方の音節のプロミネンスも必ず大きくなる。つまり，韻脚を構成する各要素（＝音節）は互いに関連し合っており，常に「一定の変化の割合（constant rate of transition)」を示すというのである。

後期古英語の10世紀頃から1000年前後にかけて，第二強勢が弱化された複合語において，（7）のような母音の短音化が生じたが（Jordan & Crook (1974: 44)，Nakao (1985:143)），これらの変化はすべて，正に上述の“Arab rule”の制約によって引き起こされたと解釈すべきであると思われる。

（7）wīsdȍm > wísdom ‘wisdom’, OE hlǽfdìge > láfdi ‘lady’, OE gǽrlȅac > ME gárlek, OE cǽapmàn > chápman ‘chapman’, sǽcnès > sécnes ‘sickness’, Strǽtfòrd > Strátford, wīfmànn > wífman > wímman ‘woman’

重要なことは，これらの複合語の第二要素の母音に置かれていた第二強勢が除去され，かつそれらの母音の長さも削減された時にはじめて，第一要素の母音が短音化した，という事実である。言い換えれば，第二要素の母音がまだ弱化していない段階では，「二子音の前」という環境にありながら，第一要素の母音は決して短音化を受けなかった。従って，（7）の短母音化は，「二子音の前」とか「閉音節」といった局所的な要因によって引き起こされた訳でなく，「韻脚」というより大きな文脈によって惹起されたのである。つまり，複合語の第二要素が弱化したことによって韻脚内の要素間の力関係に変化が生じ，「一定の変化の割合」を維持するために，第一要素も弱化に従う必要が生じたのである。

（8）は初期中英語に起こった短母音化の例であるが，この場合にも，第二音節に置かれていた第二強勢が消失したことにより，主強勢を有する第一音節の母音（ME/ɛ:/）が（/e/に）短音化された（Jordan & Crook (1974:45－46)）。

（8）Edward, Edmund, Edgar, OE ceapstow /tʃæ:apsto:w/ ‘market place’ > Chepstow

（9）に例示した二子音の前の短母音化がすでに古英語の末期に完了していたという事実（cf. Jordan & Crook (1974:44)）も考慮に入れると，（8）の短音化は，やはり“Arab rule”の圧力によって生じたと考えるべきであろう。

(9) lĕoht 'light', sŏfte 'soft', fĕoll 'fell', brŏhte 'brought', þŏhte 'thought', ăhte 'possessed', tăhte 'taught', þŭhte 'seemed', lăefde 'left', dĕmde 'judged', cĕpte 'kept', lăedde 'led', (Sax.) drădde/(Angl.) drĕdde 'dreaded', blĕdde 'bled' hȳdde 'hid', fȳlþ 'filth', drŭhþ 'drought', wrăþþ(u) 'wrath', fĭfta 'fifth', fĭftiʒ 'fifty'

4. 語中音節における母音の弱化と消失の現象

Burzio (1994:113) は，三項韻脚 (σ L σ) の中の中位の音節 L と末尾の音節 σ の間のプロミネンスの違いについて，次のような趣旨のことを述べている。

> 韻脚中位の開音節は韻脚末尾の音節よりも弱化を受けやすい。例えば，(tætəma)gouchi の方が (tætamə)gouchi よりも普通であり，このことは (rigama)role, (panama) などについても言える。この非対象性は語中音消失の分布にも見られる。例えば，(mem' ri)zation はよいが，*(memor')zation は許されない。このことから明らかなように，三項韻脚の韻律的外被 (prosodic envelope) は，「一定の変化の割合 (constant rate of transition)」(上記3節参照) という単純な概念よりも複雑であり，この外被は，中位音節における下降と末尾音節における上昇という形を伴う。

三項韻脚の非主要部音節の間に見られるこのようなプロミネンスの違いは，英語の様々な史的発達段階において観察される語中母音の弱化と消失という通時的な現象によっても裏付けられる。例えば，(10) に例示したように，語頭の強勢音節の後に無強勢音節を二つ従えるような語において，語中母音が/ə/に弱化されるという強い傾向が，古英語の全期にわたって観察される (Hogg (1992:247－248))。この母音弱化の現象は，上述の三項韻脚の韻律的外被という内在的特質に起因すると解釈するのが最も自然であろう。

(10) fugelas < fugolas 'birds', heofenas 'heavens', heoretas 'deer', roderas 'heavens', weredum 'troops' dat.pl., adesa (< adosa) 'adze',

eafera 'son', nafela 'navel', gaderast, gumena (gen.pl.), fultemian 'help', fraceþu/fraceþum 'bad', Badenoþ

(10) と同じタイプの三音節語において語中の開音節の母音が消失するという現象に関しても，(11) に示したように，古英語から初期近代英語に至る各時期から豊富な実例を指摘することができる(Nakao (1985:318－319), Hogg (1992:224－232,248－250), Gąsiorowski (1997:43), Yamada (1997:1148－1149), Jordan & Crook (1974:143－144), Dobson (1968:874－878))。これらの語中音消失も，中位にプロミネンスの谷を作るという三項韻脚の韻律的特徴によって誘発された，弱化の過程であると考えてよいであろう。

(11) a. 初期古英語の例（軽音節の後で）
betera 'better' ～ betra, yfele 'evilly' ～ yfle, ætgædere 'together' ～ ætgædre, fremde 'foreign', egþe 'rake', sigþe 'scythe', egsa 'awe', circe 'church', miċle 'much', Sætresdæġ 'Saturday' < Sæteresdæġ

b. 後期古英語の例（重音節の後で）
bōcere 'writer' > bōcre, scēawere 'observer' > scēawre, bismerian 'mock' > bismrian, fultumian 'assist' > fultmian

c. 中英語の例（軽音節の後で）
OE heonane > ME henne(s), OE þanone > ME thenne(s), OE hwanone > ME whennes (heonne), bor(e)ne, lorne, corne, torne, stolne, bere-wīc > Ber(w)ik, bere-tūn > Berton > Barton, munkes 'monks', Temse, OE æmete/æmete 'emmet, ant' > amte/ante, OE hafocas > havkes 'hawks', losede 'lost' > loste, Glouce(s)ter > /glɔ:stər/, Craucester > Craster

d. 中英語のフランス借入語における例
jaioler > jailer, dowary > dowry, marshal, nurture, nurse, palfrai, pultrie, damsel (< damosel), chimnē, remnant, cumsen 'to commence', captain, chaplain, (n)apron, dropsy, butler, partner, fancy, garnement > garment, garnson

e. 初期近代英語の例
every, watery, mystery, century, emperor, several, business,

evening, prisoner, personal, medicine, venison, enemies, crocodiles, judgement, scrupulous, excellent, homily, happeneth, strengtheneth, labouring, reckoning, hastened, happened, lettered, suffering, numbred 'numbered', indifferently, seasonable, ordinary

ただし，このような語中音消失を阻止するために，韻脚中位の開音節の母音の後に/n/が尾子音として挿入されることがある。(12) はいずれも中英語からの例である (Jordan & Crook (1974:137,224), Dobson (1968:1004))。

(12) nightingale, paringale 'equal', messanger 'messenger', papenjai 'parrot', ostringer 'falcon keeper', stallanger 'stall holder', cheuentain 'chieftain', maumentrie 'idolatry', celandine, potanger 'potager', Portingal

第1節で指摘したように，/n/のような共鳴子音（や/s/）によって閉じられた音節には母音弱化が起こりやすいという性質があり，弱化が起こると重音節が軽音節に「降格」されるので，(12) の語はすべて(σ L σ)という三項韻脚から成ると分析することができる。尾子音の/n/が付加されたことにより，韻脚中位の音節は核音を失うことができなくなった訳である。(13) のような（中英語の）地名の場合にも，同様の理由から，語中音消失は起こらなかった。

(13) Harpenden, Coventry, Amberley

ただし，例はごく僅かであるが，共鳴子音を尾子音とする韻脚中位の音節が実際に母音を消失させ，代わりにその後の共鳴子音が核音になる，という形の弱化が起こることがある。(14) は中英語からの例であるが (Jordan & Crook (1974:143−144))，これらの変化も矢張り，下降してから上昇するという三項韻脚特有の韻律的制約によって引き起こされたものであると思われる。

(14) OE lāferce/lăferce > /lavṛkə/ > larke, (屈折形) loverdes /lɔ:verdəs/ > /lɔvṛdəs/ > /lɔ:rdəs/ 'lord'

5．古英語の重子音化

古英語期に起こった重子音化の過程は（15）のような語彙に影響を及ぼした(Campbell(1959：§453)，Prins(1972：195)，Hogg(1992：73－74，293－294))。

(15) a．*aplos > æp.plas 'apples', bet.tra, ætgæd.dre, mic.cle, at.tres 'poison's', snot.tor 'wise', wæc.cer 'awake', hweoh.hol 'wheel'

b．nǣdre > næd.dre 'adder', æd.dre 'vein', blæd.dre 'bladder', tyd.dre 'weak', fod.dor 'fodder', hlæd.der 'ladder', mod.dor 'mother', tud.dor 'progeny', deop.pre 'deep', god.dre 'good', hat.tre 'hot', hwit.tre 'white', swet.tran 'sweeter', wid.dre 'wide'

(15a)の例から明らかなように，この重子音化は，語全体が二項韻脚の（H σ）として分析できるような出力を派生するという特徴を有する。(15b）に例示したように，重子音化は長母音の後でも起こったが，超重音節（extra-heavy syllables）を避けるために，これらの長母音はすぐに短音化された(Campbell(1959：§§285,453)，Hogg(1992：293))。従って，（15a）と（15b）の出力は，語頭の主強勢音節が子音で閉じられた重音節を形成し，語全体が（H σ）という二項韻脚から成る，という特徴を共有する。このことを正しく理解するためには，（H σ）という形式の二項韻脚が古英語の韻脚目録の重要な成員であったと仮定しなければならない。

6．古英語の単子音化

最後に，矢張り古英語に起こった重子音の縮約（＝単子音化）の現象（16）について考えてみよう（Campbell（1959：§457)，Hogg（1992：295))。

(16) gyl.den.ne > gyl.de.ne 'golden' masc.acc.sg., o.þer.ra > o.þe.ra 'second', æf.ter.ra > æf.te.ra 'second', dī.ġel.lic > dī.ġe.lic, E.ðer.-ric> E.ðe.ric, Æ.ðer.red > Æ.ðe.red, ǣ.met.tiġ > ǣ.me.tiġ 'empty', gy.den.ne > gy.de.ne, blic.ċet.tung > blic.ċe.tung 'corusca-

tion', reč.čen<u>d</u>.dom > reč.čen.dom

これらの例から明らかなように，語頭音節に強勢をもつ三音節語において，語中の無強勢音節の尾子音を成していた重子音の第一要素が削除され，その結果（σ L σ）という三項韻脚の構造に合致する形が派生された訳である。((16) の最後の例は，一見その出力が *(σ H σ) という形式をもつかのように見えるが，問題の語中音節が共鳴子音で終わっているので，この例を（σ L σ）と分析しても全く問題はない（上記第1節参照)。）結論として，この単子音化の現象も，韻脚構造に関する制約（この場合には「音声形は（σ L σ）の形式に合致するものでなければならない」という制約）によって引き起こされたものであると言える。

これに関連して，後期古英語に起こった (17) の変化についても簡単に触れておくことにする (Nakao (1985:319), Gąsiorowski (1997:122))。

(17) æft<u>e</u>rra > æft<u>e</u>ra > æftra 'next', þēowe<u>t</u>te > þēowe<u>t</u>e > þēowte 'slavery' dat., ōðe<u>r</u>re > ōðre 'other', dēofo<u>l</u>lic > dēoflic 'devilish', ǣme<u>t</u>tig ～ ǣmtig 'empty', wǣpe<u>n</u>man > wǣpman 'male'

これらの語は，(16) の場合と同じように重子音の縮約を受けてから，第4節で論じたのと全く同じ語中母音の消失の過程に従った。第4節で詳述したように，この語中母音の消失は，中位の音節が韻律的に最も弱いという，三項韻脚（σ L σ）の韻律的な特徴に起因するのである。

7．要約と結論

英語の韻脚目録の主要な成員として二項韻脚の（H σ）と三項韻脚の（σ L σ）を設定する Burzio (1994) の韻律理論は，単に現代英語の共時的な現象を説明するのに有効であるばかりではない。上述の議論からも明らかなように，この理論的枠組みを前提とすることによって，古英語から近代英語に至る様々な史的発達段階において発生した数多くの音変化の事例を統一的に説明することができるのである。このように，通時的な音変化は，多くの場合，語の韻律構造と深い関わりをもっていると思われる。今後このような観点からの研究を更に積み重ねて行けば，音韻史研究はもっと稔り豊かな成果を挙げることができ

るのではないかと期待される。

参考文献

Burzio, Luigi (1994) *Principles of English Stress,* Cambridge University Press, Cambridge.

Campbell, Alistair (1959) *Old English Grammar*, Oxford University Press, Oxford.

Dobson, Eric J. (1968) *English Pronunciation 1500-1700*, 2 nd ed., Oxford University Press, Oxford.

Gąsiorowski, Piotr (1997) *The Phonology of Old English Stress and Metrical Structure*, Peter Lang, Frankfurt am Main.

Hayes, Bruce (1985) *A Metrical Theory of Stress Rules*, Garland Publishing, New York.

Hogg, Richard M. (1992) *A Grammar of Old English, Volume 1 : Phonology,* Blackwell, Oxford UK and Cambridge USA.

Jordan, Richard and Eugene J. Crook (1974) *Handbook of Middle English Grammar : Phonology*, Mouton, the Hague.

Nakao, Toshio (1985) *On-inshi* (*English Historical Phonology*), Taishukan, Tokyo.

Prins, A. A. (1972) *A History of English Phonemes from Indo-European to Present-Day English*, Leiden University Press, Leiden.

Yamada, Norio (1997) "Optimality Theory and English Historical Phonology," *Studies in English Linguistics : A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji et al., 1133-1153, Taishukan, Tokyo.